

『独身者』参考資料一覧 第174回 福永武彦研究会 2019.1.27 配布資料

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

0. 福永自身のコメント

No.	タイトル	資料	初出年/月	要旨
0	初出	福永武彦全集第12巻	-	初出 書き下し 単行 1. 「独身者」初版 1975年6月 梶書房刊 限定726部、うち著者本26部、A版200部、B版500部。 2. 「独身者」中公文庫版 1982年5月 中央公論社刊
1	「独身者」後記	「独身者」梶書房 1975年6月 「秋風日記」(1978)所収	1975/6	(引用) 『独身者』は私が昭和19年6月23日という正確な日付に於いて書き始めた小説で、その日以後中判の大学ノオトに殆ど毎日せっせと書き 継いでいた筈だが、その年の秋ごろ、ノオトの3冊目の途中、第1部11章まででぼつんと途切れてしまった。(中略)『独身者』はプランによ れば全3部90章くらいから成り、それも次第にプランがふくらんで、初め千五百枚の予定だったのが遂には三千枚にもなるかという壮大 な計画だったのだから、未完と言ってもほんのとぼ口、鬨を跨いだか跨がないかくらいのところで腰が砕けてしまった格好である。 (中略)なぜ中絶したのか、今から考えても定かに思い出すことができない。(中略)結局、その年の秋作者の身辺が俄に多忙になって、残 りを書き続けるだけの時間を捻出できなかったということになるのだろうか。 『独身者』の主題は、「日記」によれば、「1940年前後の青年たちを鳥瞰的に描いて愛と死と運命とを歌う筈」だったし、そのために10人 以上の人物が相互に絡み合って複雑な絵模様を見せることになっていた。「日記」の中には彼等がどういう運命を辿るのか、すべて予測して ある。そして私には、小説というものはこうした綿密なプランに則って書くべきものだという先入観があった。私はアンドレ・ジイド—特にその 『贖金づくり』—とオルダス・ハクスリー—特にその『対位法』—の影響を受けていたようである。そのことが、かえって小説を書きづらくして いたことを、私は後に知った。しかし当時私に必要なだったものは、この長編小説の全体的構想、神の視点からする隅々までの透視だっ たに違いない。戦争が苛烈になり、いつ戦争に取られるか、またその結果としていつ死ぬか分からないような青年にとって、すべての人物を 自己の分身として生き抜くことが、短い人生を永遠に生かすための唯一の方法というふうに使われた筈である。つまり私はまっしぐらにこ の小説の中に飛び込み、小説はまた私をすっぽりと呑み込んでしまった。そういう親密な関係は、数ヶ月しか続かなかったけれども。(中 略) 私が『風土』を完成させたのは、私が清瀬の療養所にいた昭和26年のことで、それと共に『独身者』の方は文字通り篋底(きょうてい) に投げ込まれることになった。
2	夢想と実現	「新潮」昭和28年12月号 「枕頭の手紙」(1971)所収	1953/10	僕は十年前に考えていた大河小説を、その当時三百枚書いたきりで以後まったく手をつけないでいるが、その登場人物たちは今でも常に 僕の内部に住み、彼等は実在の友人たちよりも一層の現実感をもってそこに生きてたり死んだりしている。
3	対談 自由と死の 谷間で(中村真一 郎との対談)	「現代日本の文学月報」37 学習研 究社版『現代日本の文学第41巻 中村真一郎／福永武彦集』付録 対談集「小説の愉しみ」(1981)所 収	1971/4	(福永の発言を引用) あれは大河小説で三千枚のプランを立ててね。プランもできてるし、われながら書きたかったんだけど結局あれは、ロジェ・マルタン・ デュガールの影響が顕著なんだな。それに気がついた瞬間に、筆がつかえた。不思議だね。ぼくはあんなにジイドの『贖金づくり』なんて ものに夢中だったのに、やっぱり『チボー一家の人々』のほうが影響甚大なんだね。

4	対談 小説の発想と定着(菅野昭正との対談)	国文学 解釈と教材の研究 昭和47年11月号	1972/11	(福永の発言を引用) 一種の大河小説ですね。まあ、中村真一郎が考えたと同じようなことで、彼は完成したし、僕は完成しなかったというようなもんですね。ぼく、あとから気がついて、これはちょっと随筆にも書きましたが、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの「チボー一家の人々」とたいへん似た—似てはいないのだけでも、影響を多分に受けている。つまり「パノラマ」的な群像、たくさん的人物が登場する小説ですからね。ぼくはジッドがあんなに好きだったのに、そういうふうにはロジェ・マルタン・デュ・ガールの影響を受けているのは不思議です。もっとも、だいぶ夢中になって読みましたから。 「独身者」300枚、いまだに引き出しに寝ていましてね。それをもう一ぺん書き直す—全然書き直すか、それは戦争中の話ですから、それを戦後まで引き伸ばして大河小説にするか、それとも、もういっさいやめてしまって、そのままにしておくか、いまだ、思案中というところです。
5	福永武彦全小説 第11巻「序」	福永武彦全小説 第11巻 昭和49年7月	1974/7	(引用) 私は戦争中に「独身者」という長篇を書いていたが、これはざっと見積っても三千枚にはなる筈だった。ところが私はその前に「風土」を書き始め、それを中絶して「独身者」に鞍替えしたものの、結局はこっちの方も途中で放り出してしまってその十分の一も書けなかった。私に気力と時間とがあってあれを完成していたならと、後になって時々考えたが、気力や時間以上に肝心の技術が伴わなかったのだから失敗したのも当然である。失敗の経験を生かしてその後「風土」を完成させただけでもみつけものとしなければならない。しかし当時の、戦争中に於ける私の本心は、「独身者」を完成させている自分を未来の小説家として空想していたのであった。

1. 『独身者』に関する論考

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	中公文庫「独身者」解説	加賀乙彦	中公文庫「独身者」	1982/5	6	(引用) ほとんど宗教小説と言っていいほど、この小説には神の問題が繰り返し出てくる。小暮家の三兄弟にしても、良一は「神を否定する」者、修三は、「真正直に信じ切ってしまう」者、英二は両者の中間にいる者と描き分けられている。処女作が小説家の一生の仕事を通視することがあるとしたら、この『独身者』はまさしく、そのような透視力を備えている。それは作者が晩年に到達する宗教的境地を、その小説家としての出発点において先取りしているのである。 小説の構成においても、この作品には、すでに福永好みの手法がみられる。章ごとに視点が変わっていき、登場人物の意識がぎつぎつに照らし出される手法は、『海市』や『死の島』において、精緻な完成をみるのだが、『独身者』においても、それは幾分素朴なやり方ではあるが、試みられている。 雑駁な社会の出来事を直接に小説に導入するようなリアリズムの小説ではない。同じ時期に書かれた『風土』とともに、そこには、フランスの小説家、とくにジイドやプルーストに触発された、若き日の福永武彦の芸術的感性が、さわやかに染みわたっている。

2	福永武彦とキリスト教 『独身者』を軸として	佐藤泰正	国文学 解釈と鑑賞 昭和57年9月号	1982/9	7	(引用) (中略)清瀬での長い療養生活の後半期、深い孤独と不安のさなかにあった時、彼が繰り返し読んだ聖書の箇所が『ヨブ記』と「ゲッセマネの祈り」の部分であったという証言は極めて意味深いものがあろう。 作者の最も深い分身ともいべき英二は次のごとく言う。「僕には信じるべき神がない。絶対の超越者を考えても、僕はそれを内在的にしか認識得ない」。しかしその彼が清に向かっては「君のように直接に自分と神とを向い合せて考えるのは危険だ。その間に基督を置かなくちゃいけない」と言い、「ゲッセマネの祈り」にふれたパスカルの詞句を引く。「この世の果てる時まで基督は苦しんでいる。我々はその間眠ってはならない」。「清にはいつ果てるとも思われない彼の宗教的な絶望のために、修三にはこれから始まろうとする彼の闘病生活のために、英二の言葉が一つの予言のように思いなされた」という。それは彼らにとってそうであったように、作家福永武彦にとってもまた「一つの予言」のごときのものであったにちがいない。やがて闘病生活は作中人物ならぬ、彼自身のものとなる。その不眠の夜、長い「物を想う時間」の中において、作中の言葉は「予言」のごとく生き始める。 (中略)作者の分身、英二の日記にすでに『幼年』につながる「純粋な記憶」としての幼年期を掘り起こそうとする試みがなされていることも見逃せまい。
3	福永武彦の宗教意識	鈴木和子	青山語文 第14号 昭和59年3月	1984/3	9	本稿では、『独身者』『草の花』で描かれた福永のキリスト教に対する意識を中心に検討を加えている。 (引用) 『独身者』の英二と清は、それぞれ福永の青年時代におけるキリスト教に対する考え方の一面をあらわしている。すなわち、一つは清に描かれた「絶望」と「求道」である。福永も青年時代に、大きな悩みに出会い、「絶望」と「求道」を経験しているのである。(中略) 次に、英二と福永の考え方が共通している点は、キリストに対する意識である。というのは、福永が聖書の中で特に好んだのが『ヨブ記』と「ゲッセマネの祈り」の箇所だったことからして、福永はその青年時代から、自分の苦しみと、人間のあらゆる苦しみをなめて死んだイエス・キリストを考えることによって、キリスト教への関心をもちつづけていたと考えられるからである。 『独身者』『草の花』に無教会主義の人物達やその基本的な考え方がよく描かれているのは、福永がキリスト教や無教会主義に対しての関心を常に失っておらず、教理的な理解にも深いものがあつたことをあらわすだろう。また、『草の花』における作者の分身である汐見茂思の宗教意識を考えると、『独身者』における英二や清のそれよりも、一層深いものになっていることがわかる。
4	福永武彦巡礼 風のゆくえ	水谷昭夫	新教出版社	1989/3	単行	福永の生涯、作品とキリスト教との関わりについて「クリスチャン新聞」に連載され、単行本にまとめられた。「独身者」について論考としてまとまてはいないが、重要な作品として広範に言及されている。 (引用) 『独身者』の主人公たちは、ハクスリーの主人公たちのように数人によって構成されている。というより、それは一層、ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』や『悪霊』を思い浮べさせる。(中略)そこで戦わされる熱っぽい観念論は、おそらく以後の武彦の作品のなかで再びこれほどの素直さでもって語られることはない。それほど直截であり、切実である。(中略)作品は、真剣に自分の生と死と面とむきあって人が生きんとするとき、必ず出会う孤独というものを、音楽の「対位法」のように奏でてみようとした。 さしませた戦時下の死の恐怖、それから逃亡をつづけた福永が、彼の文業のなかで、もっとも飾り気のすくない『独身者』で自分の全存在を賭けた、キリスト教を書いた。(中略)人は『独身者』が作品として幼稚で不完全だと言う。私にはそうは思えない。作品の形式や成行の均衡を破ってまであらわれる主人公たちの議論の面白さは、むしろ福永文芸のなかでもまことにさすがしく、精彩あふれるものになったと思う。 『独身者』で中絶したドラマを、武彦は「巧妙な」小説の技法を駆使して『草の花』で展開させた、と言える。

5	『独身者』論 ー基督教素材を めぐってー	宮島公夫	深井一郎教授退官記 念論文集	1990	8 (要約・引用) 筆者は、『草の花』は基督教的素材という点において、『独身者』と深い繋がりがあると考え、『独身者』の基督教に関する素材を分析し、『草の花』と対比的に捉えることによって、初期の福永の基督教素材形象化の特質を明らかにし、同時に『独身者』中絶の要因たり得たことを指摘している。 『独身者』の基督教的主題として以下の4点を挙げている。 ①基督教を巡る人物が類型化されて描かれている。 ②基督教への批判 ③無教会主義が描き込まれている。 ④孤独な信仰が指向されている。 『草の花』とくに「第二の手帳」においては、これらの基督教的素材が変形されあるいは平行的に転移されている様子が窺えるとしている。たとえば汐見の人物設定は、「孤独な信仰」という点で修三、また神から離れたという点では英二に同じ、「孤独を選んだ」という点ではむしろ牧鷹夫に等しい。また、『独身者』に見られた観念的な議論が『草の花』では解きほぐされている。以上のように『草の花』においては『独身者』の基督教素材との繋がりが指摘できると同時に、基督教素材の熟成が感じられる。この熟成は基督教との距離が接近した療養所体験と無関係ではあるまい。 「第二の手帳」が生まれた時、その時点で『独身者』の持つ作品としての価値は半減したと言えよう。なぜならば『独身者』には種々雑多な素材の混入された中で萌芽をみせている主題がいくつかあり、中絶したことにより多分に可能性で終わっているが、そうした主題の中で唯一主題の骨組みを垣間見せるのが信仰問題ではないかと考えるからである。
6	『夢の輪』と「心の中を流れる河」の間 ー福永武彦の基督教意識についての一考察ー	近藤圭一	聖徳大学研究紀要(人文学部)16	2005	8 本稿は『夢の輪』と「心の中を流れる河」の対比について、特に基督教意識の面から考察している。 (『独身者』関連事項の引用) 『夢の輪』は『独身者』の挫折を受けて、そこで失敗した「大河小説」を、今まで試みてきた「純粋小説」の技法も盛り込みながらも一度試みようとしたもので、一種の「止揚」といえるものである。 福永文学における基督教の流れを考えた場合、信仰に関して種々の議論が行われた『独身者』の世界が、『草の花』では無教会主義者にして敬虔な信徒と神を捨てたと自覚する孤独な信仰者の対話に純化されたことは見過ごせない。(中略)そこには、神に、そして基督教に対置される「人間」の存在が、『独身者』の世界よりまさって浮かび上がってくるのである。神を巡る議論ではなく、人の心の問題になっているのである。そして、その流れの上に「心の中を流れる河」がある。信仰と人間の相克は『独身者』から「心の中を流れる河」に至る軌跡に明らかである。 『夢の輪』が『独身者』の挫折を乗り越えようとして考案されたことは、作ろうとした意図、外見的構成を規定した。しかし、そこに盛り込もうとしたものはまさしく「人間」の物語である。『独身者』から『草の花』、そして「心の中を流れる河」まで、姿を次第に変えながら続いてきた、神と対話する人間を描こうとするのではなく、単なる人だけの世界を描こうとしたのである。そのために基督教意識を引きずってきた「心の中を流れる河」は「抹殺」されなければならなかった。それは神との距離で苦しんできた福永にある結論をもたらした。彼の文学には以後この種の神学論争が見られなくなったのである。

7	『独身者』における「純粋記憶」をめぐって	西岡亜紀	福永武彦論 「純粋記憶」とボード レーン 第2章 モティーフの誕生	2008/10	単行 20	<p>(引用) 『幼年』の「純粋記憶」というモチーフの直接の原型と考えられるものが見出されるのは、『独身者』の第1部9章「英二の日記」と題される章である。小説家志望の英二は、日記のなかで「僕の幼年時代、或は少年時代を書こうというプラン」を語る。(本文引用略)ここに語られている「夾雑物のない、謂わば純粋な記憶」というモチーフが、「本人にとって純粋に保存されたままの状態」という『幼年』の「純粋記憶」というモチーフの原型と見なされるものである。そしてここで極めて重要なことは、この「プラン」のなかで語られる「幼年」が、「記憶」としての「幼年」であるということである。「幼年」を憧憬しそれを創作によって取り戻そうという傾向は、既に詩作においても現れていた。だが、成人の現在の意識のなかに立ち現れる「記憶」としての「幼年」を意識化し、創作上のモチーフとして構想したのはこれが最初と言えよう。</p> <p>『独身者』の構想において最も重要なのは、「どういふことを思い出したかよりも、どういふふうにして思い出したか」という方向性である。「幼年」の記憶に関して、その内容よりもそれが再現される過程に着目しているということが、福永の記憶観の根幹にある考え方である。「記憶」を問題にするとき、重要なのは、過去ではなく「記憶」という現象そのもの、言い換えれば「記憶」という現象に立ち会っている現在のほうであると言えよう。つまり、福永が「幼年」を問題にするのは、遠い過去に何があったかというよりも、その遠い過去が現在においてどのように残っているのか、あるいは現在においてどのように立ち現れてくるのかということである。</p>
8	福永武彦とキリスト教	西田一豊	解釈と鑑賞 4-74 2009年	2009	6	<p>(引用) 作家として出発する以前の福永と、最後の長編小説となった『死の島』を書き終えたのち信仰を得た晩年の福永の傍らには常にキリスト教が存在したことは明白である。しかし翻ってその間に書かれた福永のテキスト群にキリスト教の影響が見られるかという点、その判断には躊躇せざるを得ない。</p> <p>『独身者』や『草の花』ではキリスト教やその信仰については批判的に描かれており、個に根ざした「倫理観」である「孤独」の可能性そのものに、キリスト教を超えた超越性が求められているのである。それゆえ、先の(『草の花』の)エピグラムの問題に立ち返るならば、消された句はやはり作者による意図的なものであったのではないかと考えられる。福永は『草の花』の時点において、「主の言葉」よりも「草」たることを選んだのである。</p> <p>『草の花』でのネガティブな関心のあり方から、晩年の「静かな回心」を果たす福永はどのように繋がっているのだろうか。この問題を考えるには、テキストの中にキリスト教信仰への徴を読み取ろうとするよりも、キリスト教者であった母をめぐる問題系から接近するほうがよいように思われる。つまり『幼年』で亡き母の記憶を描く前後から、福永のテキストにしばしば出て来るようになる「妣」や「古里」といった言葉に表される母体回帰への志向が、福永個人のキリスト教への回心を容易ならしめたと考えられるのではないだろうか。無論こうした読み方は、テキストと作家とを安易に結びつけてしまいかねないが、晩年の作者の回心へ至る何かそれがそれまでのテキストにあるとするならば、それは「母」をめぐる主題系においてほかないと思われるのである。</p>